

変わるものと変わらないもの、変わってほしくないもの



随 筆

吉 野 勝 美*

changes and continuity, conservatism

Key Words : nature, human being, society, education spirit

平成16年大阪大学を定年となり、故郷島根県産業技術センターに奉職して12年が経過した。健康であれば来年は喜寿である。18歳で故郷から大阪に拠点を移し再び故郷へと随分長期間経過した筈であるが、子供の頃と変わっていない自分に気が付いた昨今である。

その間、随分いろいろな方々のお世話になり、感謝すべき方が非常に多い。筆者自身の生活パターン、行動様式、考え方に大きな影響を受けた方の中に配属された犬石研究室の助手だった久保宇市先生がある（後に近畿大学理工学部長）。特攻隊に志願して出陣する直前終戦を迎え、大学の研究、教育に舞台をかえられた方である。筆者は誰とでも衝突する勝手な男と最初は思われたようであるが、そこが気に入ってもらってその後随分可愛がって貰ったのである。対人関係も余り上手くはない筆者には習うところが多く、どんな方にも臆することなく接し、どんな依頼事項も断らず出来るだけ引き受けること等を学びその後の行動は随分変化し、結果、広い分野の方々と知り合い良い関係を持てることとなった。

島根で奉職する頃からは佐々木正先生の影響を大きく受けた。先生はシャープ（株）の草創期から技術の中心として牽引され、副社長を務められた。尊敬するところ大である。

最近、大量に出てきた昔の資料を整理し始めると、

多くの方々の名刺が出てきた。その名刺を見る度、当時あったことがいろいろ思い出されてくる。名刺交換の時点では特別の人でなく、大学の助手、企業の平社員であった方が、後に大教授、大社長になり大活躍をされた方が多くおられる。それで最近若い人達に“貰った名刺は捨てずに大事にしておくように”と云っている。しかし残念ながら筆者自身は貰った名刺の大多数は失っている。古い名刺を見て思いだしたことを少し記す。実名を出すのが笑って見逃してもらえらるだろう。

まず、筆者が30歳代後半、多分助教授の頃である。ある日突然電話のベルが鳴った。“吉野先生ですか、糸川です。講演をしていただけませんか”、“どちらの糸川様でしょうか”、“糸川英夫です”、“エッ、ロケットの糸川先生ですか”、“そうです”、“先生何かのお間違いではないのでしょうか。私はロケットはやっていませんので素人ですが”、“そのことは存じています。実は、先生がやられています新しい素材、特に将来を担うであろう有機系の素材、デバイスの可能性についてお聞きしたいと思ひまして”、“先生、私などいいお話はとてもできませんが”、“お忙しいと思いますが、ぜひお願いします”、“それでは余りお役にたてないと思いますが、一応つとめさせていただきます”、“有難うございます。ところで謝礼いくらにしましょう”、“謝礼は結構でございます。先生の前でお話しするだけで光栄ですから”、“いやいや遠慮なく仰って下さい、好きなだけ云って下さって結構ですよ”、“本当にお話しさせていただくだけで光栄です。お気遣いなく”と云うようなやり取りがあった。

心の中で余り大きな額を云えば、何や小物のくせに、余り小額を云えば、その程度の小物か、と思われるかも知れないとの気持ちもあったが、それ以上に光栄であった。結果としていくらいただいたのか記憶がないし、糸川先生を始めたくさんの方々の



* Katsumi YOSHINO

1941年12月生
大阪大学工学部電気工学科卒（1964年）
現在、島根県産業技術センター 所長
大阪大学名誉教授 工学博士
電気電子工学
TEL : 0852-60-5128
FAX : 0852-60-5144
E-mail : yoshino@shimane-uit.jp

を前に講演したことははっきり覚えているが、何の話をどんな風にしたかは全く思い出せない。

糸川先生の名刺が出てきた一塊の資料の中に糸川先生からの封書があり、講演の後の礼状と録音テープが入っていた。最近あらためて聞いてみた。糸川先生がイスラエル視察の後、日本の研究開発、産業がどうあるべきかのお話であった。その最初の部分を紹介する。

“私は昭和10年東大の航空工学科を卒業しまして、中島飛行機に就職しました。ところがすぐにえらい道を選んだな、大変だと思うようになりました。何しろ、アメリカが対日石油禁輸を始めたんです、それからその翌年、日本に対するボーキサイトの輸出も禁止したんです。アルミニウムはボーキサイトから取り出します。その軽量金属がなければ飛行機は作れませんし、石油、燃料なしでは飛べません。えらいことになったこれでは中島飛行機も倒産だ、と思いましたね。ところが、翌年会社に東条英機が来て話をするんですね、“君たち心配せず安心してしっかり飛行機を作ってくれ”、と。誰かが云いましたね、“閣下、しかしボーキサイトがなくて、しかも石油がないと、飛行機は作れませんし、飛べません”。“君たち心配するな、インドネシアにいくらでもあるんだ、それを持ってくるから心配いらない”。“でも閣下、インドネシアと日本の間にはアメリカの海軍、空軍がいるから運べないんじゃないでしょうか”、“心配なし、そのうちハワイでアメリカ軍を叩き潰すから、持って来れる。安心して飛行機を作ってくれ”。そうかと思って、飛行機作りに専念しました。戦闘機隼（はやぶさ）なんかも作りました。”そんな話がテープには入っていた。

糸川先生は戦後アメリカが日本に航空機を製造することを禁じたため、ロケットを始められたと思うが、ベビーロケット、カップロケット等本当に先駆的な研究開発をされ、日本のロケットの生みの親である。このカップロケットで初めて日本の人工衛星が上がった。

日本の宇宙科学技術、産業の先駆者であったので、発見された新しい惑星がイトカワと命名され、イトカワから試料採取のため飛ばされたロケットがはやぶさであり、様々な難関を潜り抜け、使命を全うしイトカワの砂を持ち帰るのである。はやぶさがこれまた糸川先生が中島飛行機で作られた飛行機から名前を取ったものである。太平洋戦争直前のことなの

でアメリカのスパイが中島飛行機の周りにもいた筈であり、東条英機の話はアメリカ側に伝わっていて、日本軍の真珠湾攻撃、奇襲をアメリカは待っていたのだろう。

さて、阪大を定年になって故郷のお手伝いをするようになって、故郷が素晴らしい所であり、豊かな自然が昔の姿で残っていることを知った。自然は変わって欲しくないものである。筆者のミッションは島根県全域に関わるものだから、玉湯川が宍道湖に注ぐあたりに育ち、体験した宍道湖の南岸の環境、自然だけでなく、宍道湖の北岸、中山間地、石見地域、隠岐を含めてあらためて素晴らしい自然と歴史を知ることができたのである。自然、環境と共に伝統、社会も急激に大きく変わって欲しくないものであることを実感した。

一方、大阪を中心に結構世界中を飛び回り、筆者自身大分変わったのかと思っていたが、最近になって余り変わらず、本質は昔のままであることに気が付いた。そんな頑固一徹の面もある筆者の思いをいろいろな所で話したり、記したりしているが、この平成28年、電力関係分野の雑誌「電気評論」から頼まれて書いた小文、巻頭言を以下に転載する。

電気評論（平成28年、5月号）巻頭言

のぼせ者でありたい 吉野勝美

今、産業界、社会は激変しつつあり、地方は衰退の危機に直面して、地域創生が叫ばれている。しばしば著者も話し合いの場に呼び出されるが、云うことは決まってある。

地域創生の鍵は人にある、具体的には「のぼせ者」の存在である。のぼせ者と云う言葉は著者の故郷出雲地方の方言で、何かの事柄に利害損得を捨てて全力で必死に取り組むので、時には変人扱いされ、自らと周辺に犠牲をもたらすことから迷惑がられることもある。

昔はこんなのぼせ者がたくさんいたが、昨今は、皆冷静過ぎ、時には冷た過ぎと思う。

一昔前は会社を愛する人も多くいた、決して義務だから、給料をもらうからだけではなく、何せ会社とその仕事を愛する人がいたのである。ある時期には会社人間として批判的にみられる風潮があったのも事実である。しかし、本当は愛する気持ちになれば、会社でのいい人間関係があれば、会社にのぼせる人がいても不思議はない。

現在、一部を除き日本の企業は非常にきつい状況

にあり、中でも電気関連業界は厳しく、時には外資系の企業に買収されるようなことも珍しくはなくなっている。

なんでこうなって来たのだろう、財務的問題、技術的問題、人災とも云うがトップのミスなどいろいろあろうが、会社が社員にとって温かい存在でなくなっていることの影響も大であると思える。その典型が非正規社員の急増である。非正規社員がある割合以上であるのは基本的に間違っている。現状では非正規社員は給与、雇用継続の義務化を逃れるための側面もあるように思える。もしそうであれば、愛社精神が生まれるわけがない。

どうもある時期から日本では、かつての終身雇用、年功序列の日本型雇用形態が、悪のように評価されることが多くなったのである。何となく会社の存在と隆盛は株主のためにあるような錯覚を多くの人が受け始めている。

同じような思いは原子力技術者に関しても云える。東電の福島原発の深刻な大事故の後、原子力とそれに関係する技術者、研究者に冷たい視線が注がれてき続けている。居心地の悪さのため日本から原子力技術者が諸外国に逃れることがあっても不思議はなく、また原子力を専攻としようとする若い人が激減しているのも事実であり、これは日本にとって極めて深刻な問題である。原子力施設の建設にも、運転、維持、処理にも、さらに廃炉にもありとあらゆるところに原子力技術者は不可欠である。また、近隣諸国の膨大な数の原子力発電所が将来深刻な事故を起こすことをある程度想定しておく必要があり、その影響は海を越えて日本に深刻な影響を及ぼす。その場合、日本の原子力技術者がその地に行って事故処理、終息に大きな寄与をすることが絶対に必要となる時が来るのである。

地方創生の話に戻ると、故郷の人と自然を愛する、国を愛する、地球を愛する気持ちがのぼせ者の存在を生み出す筈である。のぼせ者になって何かをやること自体が楽しいと云う心になれるのが最高である。それから、昨今、誰かが失敗してもとことん追求し、叩き潰して二度と立ちあがれなくするような社会的風潮があり、とんでもないことである。一度転んでも、失敗しても再起、再生可能とするような、温かく見守るような社会になる必要があるように思う。それがあってこそこのぼせ者が生まれやすくなるように思っている。のぼせ者はまた広い視野と長期的視

点を持つ必要がある。

もう一つ気にかかることは電気エネルギー問題である。電力流通の自由化が始まるが、電源が自然エネルギー、再生可能エネルギーの利用を含めて多様化することは重要でいいことである。しかし、エネルギーが国家経済、存亡を左右する事態が出てくる可能性があり、電力エネルギーには公益性があることは肝に銘じておく必要がある。いい方向に変えるのは当然であるが、近視眼的に自らの利益を念頭に、新しい体制を早急に持ち込むのは慎重である必要があり、不都合があれば再度修正、変更が可能な形にしておくべきである。何でもかんでも儲けにつなげようと云う浅ましい人たちが主役にならない社会になって欲しい、そんな視点で動くのぼせ者もいて欲しいと感じている今日この頃である。

筆者は元来、研究者、技術者、教育者であり、定年までとその後の何年かの経験で学んだことで伝えたいことがいろいろあるが、紙面の都合で、ひとつだけ脱常識の重要性だけを述べておきたい。常識を捨てると面白いものがいろいろ見えてきて、新しい素晴らしい展開がはかれると思っている。それと最後にもう一言、いろいろな人がいると云うこと、足の速い人もいれば、遅い人もおり、仕事の速い人、やっとなついていける人もおり、速い人を褒めるのは当然であるが、遅いからいろいろなことが見えて面白い流れに繋がることだってあり、道を踏み外さないですむこともある。いろいろな人がいて、それで社会である。数は少ないがのぼせ者がいて、のぼせ者でない人がたくさんいてそれでバランスする。

以上

いつも締切ぎりぎりになってから原稿を書く悪い癖も昔のままである筆者は、センターで5時過ぎの定時まで働いてホテルに帰ってから、子供の頃の習性そのままに、目の前の宍道湖に一時間ほど魚釣りに出かける毎日であり、こんな話をすると、ホテルには釣りのセットが用意してあるのと聞かれるが、何のことはない、子供の時使っていたと同様の長い釣竿、5、6段を引き延ばす延べ竿を使っており、これを縮めてホテルの部屋に保管している。餌は到着した松江駅からセンターへの途中にある釣具屋に立ち寄り数日分のゴカイを買い込みホテルの自室の冷蔵庫の中に保管するのである。週末には全て使い切り冷蔵庫はきれいに掃除して痕跡も、匂いも全く残ってはいない。先ほども目の前の宍道湖岸から

20匹ほどのハゼとセイゴを釣って帰ったところである。これを近所の料理屋、お好み焼き屋さんを持って行って料理してもらうが、釣りたいの汽水湖の魚は美味である。私が少しは食べるがお客さんや、翌日センターの昼食時に皆さんに食べてもらう。人に喜んで貰うのが一番と思っているが本当は皆さん迷惑に思ってるんじゃないですかとの忠告もある。

私を見て、“ここでは簡単に釣れるんですね”、と云う人がいるが、“周りの釣り人を見ても余り釣れていないでしょう。私の腕が特別にいいからですよ”、と云う。“釣りの極意は何ですか”、と聞かれるとこれも答えは一つ、“どこに魚がいるかを直感で掴むこと、魚の気持ちになって釣ることです。魚のいない所では絶対に釣れません”。“釣りの経験が研究にも生きますか”。“そうです、直感が大事でそこに良い種があるかを直感で知ることです”。

島根の環境を知った人に云われる、“素晴らしい所ですね、でもこんな素晴らしい所に生まれて吉野君はなんでロマンチックになれなかったの”。ドイツの親友シュミットさんを定年間に宍道湖岸に連れて行った時も云われた。“こんないい所に生まれて、なんで大阪に50年いたの、もう一度縁を持ったら”。その助言通り今は平日の殆どを島根通いである。

御年100歳を超えられた佐々木正先生はシャープの事業を立ち上げ成功させた立役者、また、孫正義氏が事業を立ち上げる時の最大の支援者であり、定年後も研究開発に随所で力を発揮されてきた。古くは、東大理学部学生だった江崎玲於奈博士を神戸工業に引っ張ってきてノーベル賞に繋がるトンネル効果の研究のきっかけを作るなど猛烈な貢献をなされている。戦争中レーダーの技術資料、部品をドイツ軍の潜水艦Uボート二隻に分乗して日本に向かわれたが、一隻が途中撃沈され、佐々木先生ののった一隻が日本に着いた。大変な幸運の持ち主である。島根県浜田藩の家老の家系と聞いている佐々木先生にはいろいろなお話を直接お聞きしたが、少しだけ紹介する。98歳くらいの頃島根にいらっしゃった時、県関係者等と一緒に席でのご発言である。“私もうピッチャー役をするのをやめることにしました”周りのみんなが云った。“先生、困ります、続けてお願いします”そうしたら仰った。“後、ピッチャーは吉野先生お願いします”すぐに慌てて云った。“それは困ります。私はとてもそんな大役ができる器ではありません”すると即座に仰った。“吉野先生心

配いりません。吉野先生がピッチャーをやってもらえるなら、私がキャッチャーをやります”。素晴らしい限りである。キャッチャーが全軍を見て指揮をすると云うことである。

佐々木先生は戦前京都大学工学部電気工学科の卒業である。実はほぼ同じ頃、昭和16年に大阪大学工学部電気工学科を卒業された池田盈造氏のご家族から“もう不要になりましたので”、と云うメモを添えて電気系の同窓会である滞電会事務局に受講された多くの教科の講義ノートが送られてきていた。その後、筆者が滞電会会長の折、貴重な資料であると思い、これに筆者の駄文を添えて監修し“古い大学講義ノート”シリーズとして電磁気学、交流理論等から始まって全10巻を出版した。(米田出版 2012～2016) 太平洋戦争直前の時代でありながら講義のレベルは極めて高く、むしろ現在の講義より高度で驚くほどである。しかも当時の社会情勢の中で英語交じりで講義されている。戦後いち早く日本が復興できた背景にはこのような高い教育レベルがあったのである。先生方は高い意識、信念を持って高度な教育を行い、学生はそれに必死に応え猛烈に勉学に励んだことが理解できる。昨今の教育レベルの低下が懸念されるところである。教育に対する崇高な意識で指導を行う先生方、それに付いて行く学生さん達の姿勢は決して変わってほしくない。

世の中には変わって欲しいものもあるが、変わって欲しくないもの、変わるべきでないものがある。基本は暖かい人間関係である。素晴らしい方々のお蔭にあらためて感謝の意を強くしているこの頃である。

今年5月筆者は電気学会の総会で名誉員に推挙された。一緒に推挙された桂井誠東大名誉教授は挨拶の前、友人から聞いた話しをしますと筆者の耳に囁かれた後、次の話をされた。“70歳を超えて大事なのは“きょうよう”と“きょういく”です”。皆が真面目に聞いていると、“きょうようとは今日用事があること、きょういくとは今日行く所があることです”と結んだ。筆者に用事と行く所があるのも皆さんのお蔭である。教養と教育ではない。

阿蘇山がこの原稿締切時に噴火した。地球活動の変化は人間の歴史に比べ桁違いに長期にわたり繰り返す。江戸時代の大飢饉も火山の噴煙が太陽光を遮ったためである。噴煙での地球表面の光量の激減、太陽電池の汚染は電気エネルギー危機をもたらす危険性がある。